

ばく りゅう 麦粒

2022. Winter

麦粒／NO. 138

発行・キリスト教センター

目 次

私たちはわかっているのだろうか？ … 持田辰郎（3）

皆一つの体となるために …… ロバート・キサラ（6）

実験動物が教えてくれたこと …… 酒井淳一（9）

恐れるな …… ザノッティ・フランチェスカ・ワンダ（12）



私たちはわかっているのだろうか？

持 田 辰 郎

なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らには明らかだからです。
神がそれを示されたのです。

(新約聖書 ローマの信徒への手紙 1章19節)

ご紹介に与りました持田です。この大学で40年間哲学の教師をしており、今年度で定年を迎えることとなりました。キリスト教徒ではないのですが、西洋哲学が専門なものですから、キリスト教やキリスト教神学とはつかず離れずの微妙な関係にあります。引用していただいた『ローマ書』の一節は、キリスト教と哲学の関係が論じられるとき、いつも引かれる箇所です。ここで言う「彼ら」とは、神についてあれこれ語りながら実際には不敬虔な輩たちのことであって、その代表が哲学屋ということになります。

私の授業でも「神」という言葉は頻出します。「神」という言葉が出てくるだけで、素朴に反感を感じる学生もけっこういます。目に見えないもの、したがって（彼らにとっては）存在しないものについて考えることに何の意味があるのか、と。あたかも物体として眼前にあるもの

だけが大切で、それだけわかっているだけで十分であると言わんばかりにです。

哲学とキリスト教は明らかに違うのですが、共通する部分もあります。今日のテーマは、その共通部分の話です。それはこういう問題です。——私たちにとって大切なのは「物体として眼前にあるもの」なのでしょうか。そして、具体的なものについては「わかっている」つもりになっていますけど、ほんとうでしょうか。

10分程度でわかるつまらない話です。ただし、その10分で「哲学とは何か」がわかっているようにします。え、お前の授業を一学期聴いたけど、哲学とは何かまったくわからなかったぞ、と言われるかもしれません。そうでしょう。哲学は長く話せば話すほど複雑怪奇になって、わけがわからなくなってきました。しかし、哲学の大元はたった一つの問いで

す。その一つの問いについてなら10分で充分です。

美しさとは何か。プラトンはこの問いからイデア論を展開しました。美しさは一つの例で、正しさでも、善さでも、何か価値を表す言葉なら何でもいいのですが、美しさで考えて見ましょう。美しさとは何か。みなさんはこの問いに答えられますか。もちろん、「美しいもの」の具体的な例ならいくらかでも挙げるができます。美しい人、美しい花、美しい物語…。また美しいものと美しくないものをはっきりと区別さえしています。それなら、美しさとは何か、言えるはずですよ。

でも言えない。これはとっても変な状況です。美しさとは何かがわかっていれば、これは美しい・美しくないと区別できて当然です。しかし美しさとは何か、わかっていないのに区別している。つまり物差しがないのに測っているのです。

私たちは毎日さまざまな判断に迫られて生きています。どうすべきか、何を目指すべきか、それなりに理由を見つけてわかっているつもりになって選択しています。しかしその選択の理由に、さらに「なぜ」と問い続けると答えられなくなってきます。「なぜ学校に行くのか」「なぜ

知識が必要なのか」…。そう問い続けていくと、必ず「どのような人生を送るべきなのか」という問いになっていきます。私たちの日々の具体的な選択の背後には、必ず人間という存在の理由や人生の目的についての問いが控えているのです。ソクラテスが問答法によって発見した「形而上学的問い」です。

その問いへの答が明確にわかっていれば、日々の判断は論理的に導き出せます。根拠とそこからの帰結なのですから。しかし、私たちは、日々の判断には答を出しているのに、根拠はわかっていないのです。「美しいもの」と「美しさ」の場合と同じです。

わかっているようで実はわかっていない…このような状態にあることを、パスカルは「人間は中間者である」と表現しました。人間は「無」と「神」の中間者だということです。無ではないからまったくわからないわけではない。しかし、神ではないから結局のところはわからない。

同じ事態を、カントは形而上学の不可能性として語りました。これがカント哲学全体の結論です。

神学者のトマス・アクィナスは、「私たちは知られざるものとしての神に結び付いている」と表現しました。さすがに

大神学者、うまく言うな、と思います。
美しさとは何か、正しさとは何か…。すべて私たちには知られざる神の領域です。しかし、美しさ、正しさ…と縁を切って生きていくことはできません。

無神論者であっても事態は変わりません。神を拒否したからといって私たちが「わからないもの」に振り回されるという状態から逃げ出せるわけではないからです。無神論者サルトルは、神を拒否する覚悟について語りました。わからないのに選択すべく与えられている自由は、人間にとって刑罰だと言っています。

以上、プラトン、ソクラテス、パスカル、カント、トマス・アクィナス、サルトルと挙げてまいりました。哲学史の中心をなす人々ですが、他のどんな哲学者をとりあげても、今日の話はしているは

ずです。なぜなら、哲学とは結局のところ、この「私たちはわかっているのだろうか？」という問いについて、ひとりひとりがどう考え、どういうスタンスをとって生きていくかということだからです。

この問いに決まった答などありません。「哲学に答はない」と言われるのはそういう意味です。しかし、生きている以上、自分の考えをそれなりに作り上げていかなければなりません。20歳のときの考えと30歳のときではまた違ってくるでしょう。正解はないのに、いつも「何か」を探し続けることになるのです。哲学とは、ひとりひとりの人間の、そういう営みのことだと思います。

以上です。ご静聴、ありがとうございました。

(もちだ たつろう 法学部教授 2021.11.2)

皆一つの体となるために

ロバート・キサラ

恵みの賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、仕えるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての人の中に働いてすべてをなさるのは同じ神です。一人一人に霊の働きが現れるのは、全体の益となるためです。ある人には、霊によって知恵の言葉、ある人には同じ霊に応じて知識の言葉が与えられ、ある人には同じ霊によって信仰、ある人にはこの唯一の霊によって癒やしの賜物、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。しかし、これらすべてのことは、同じ一つの霊の働きであって、霊は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様です。なぜなら、私たちは皆、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの霊によって一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊を飲ませてもらったからです。

(新約聖書 コリントの信徒への手紙一 12章4～13節)

私たちはみな自分の歴史、自分の性格、自分の才能・得意なもの・苦手なこと、自分の考え方を持つなど、人類の多様性を表しています。今朗読したコリントの信徒への第一手紙によりますと、その多様性は神が計画したものであり、私たち

がお互いに補完し合って、一つになるのは神様が望んでいるところです。

最近、多文化の交流、多文化間コミュニケーションが注目されています。例えば、違う文化、違う考え方や見る目を持っている会社員と一緒に働くとか何か新しい

発見ができ、会社の有益になるという考えで、雇用の段階で多様性が重要視されているケースが多いようです。学校の場合でも、違う文化との触れ合いが学生の成長のためになる、という考えで短期留学などのプログラムが積極的に導入されていることも最近よく見られます。私が所属しているカトリックの修道会でも、国際性が以前からの特徴ですが、私たちは最近多文化交流・多文化間コミュニケーションについての勉強を促進しています。

私は現代日本宗教の様々な社会貢献を自分の研究のテーマとしていますが、以前、日本の宗教における平和思想・平和活動を研究していた時、ある宗教団体が「他者」を知る、「他者」と友達になることの大切さを強調し、自らの平和活動の一環として一般信者の短期間国際交流プログラムを展開していることに目をとめました。具体的な例では、一般の主婦がマニラに行き、そこで教団の募金活動で援助をもらっている人々と出会って一週間一緒に生活をするというものです。そうした体験を通して、信者の善意で助けられている相手の人々は単なる「貧しい人々」ではなく、名前を持っている、ある生活環境で生きている、家族や愛する

人々のために一生懸命に働いている、根本的に自分と同じような人間であると自覚します。

このような経験が有意義であると認めながらも、私は一つの疑問を抱いていました。その交流によってお互いの理解が深まるといいのですが、反対に、単にお互いの偏見を確認するケースもあるのではないか、ということです。他者との出合いの機会を増やすだけで文化間の無理解・拒絶傾向を解消できると思うのはあまりにもナイーブではないか、と問いかけたいぐらいでした。現在、世界の各地に起きている移民拒絶運動はその事実を表していると思います。

本当の意味での文化間交流は自然に起こるものではなく、それを育む必要性があると思います。異文化を受け入れる態度、文化についての確かな理解、異文化の人々とうまく共働する技術、このすべての課題が文化間交流を深める鍵です。私たちの多様性は神様が計画したもの、私たちがその多様性を尊敬し合い、お互いに学び合い、多様性を宝物として積極的にお互いの意見などを出し合うことによって新しい発見を期待する、その態度が基本だと思います。

私が所属している神言修道会では

“One heart, many faces”、「一つの心、多くの顔」というキャッチフレーズが採用され、世界中の私たちが活動している各教会などでそれを広めようとしています。多様な顔、多様な性格、多様な文化などを持っている私たちの心は一つである、私たちが目指しているものは同じである、という意味で、私たちは全世界でそれを実現するために活動し続けていま

す。先ほどの聖書の朗読箇所での聖パウロの言葉を借りますと、「わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体になるために、皆一つの霊」、一つの心を持っていることを認めましょう、ということなのです。それは今、私たちに対して神様が最も望んでいることではないかと思います。

(ロバート・キサラ 南山大学学長 2021.11.16)

実験動物が教えてくれたこと

酒 井 淳 一

私は人の子らについて心の中で言った。

「神は彼らを吟味し、動物にすぎないことを見極めようとする。」

人の子らの運命と動物の運命は同じであり、これが死ねば、あれも死ぬ。

両者にあるのは同じ息である。人が動物にまさるところはない。すべては空である。

すべては同じ場所に行く。すべては塵から成り、すべては塵に帰る。

人の子らの息が上へ昇り、動物の息が地に降ると誰が知らうか。

(旧約聖書 コヘレトの言葉 3章18～21節)

わたしの専門分野は生理学です。生理学は身体の構造とその機能について、言い換えれば、生きている仕組みがどうなっているのかを知ることです。具体的には呼吸、循環、消化吸收、内分泌、排泄、神経や筋肉などの正常機能やその調節機序に関することが対象になります。また、その延長線上には病気の成り立ちなども分野に入ります。これまでに生理学の講義・実習や研究ではたくさんの実験動物を使ってきました。使ったと言うよりは実験動物に助けてもらったと思います。例えば、筋肉の収縮機構は生理学のどの本にも詳細に書かれていますが、実際に

実験動物から筋肉を取り出して収縮を観ればどんな説明よりもはっきり分かります。また、内分泌の分野においても血糖値のコントロールについて詳しく解説しますが、実験動物を使い低血糖発作の実験を観れば血糖値の調節機序がどれほど大切であるかよく理解できます。ここに挙げたものは動物を使った実験の一例ですが、実験動物から知ることとはどんな厚い生理学の本を読むより、またどんな詳しい解説を聴くより、一番分かりやすいと思います。また動物実験で感じた印象は永く記憶に残ります。

わたしが主に研究してきました生理学

での分野は血液です。特に血液が固まったり溶けたりすること、専門用語では凝固・線溶と言いますが、血液独特の特性に関することです。通常、怪我をして血液が流れ出てしまっても小さな傷なら数分ほどでその出血は止まります。このような経験は誰しもあることです。その一方で、血液が固まるのは出血した部位だけで、決して全身に流れている血液が同時に固まってしまうことはありません。そんなことから血液は単なる液体として身体の中に存在しているのではなく、常に滞ることなく全身を巡っている不思議な液体で、いざ出血という時は止血機構という生体防御機能をその内に秘めています。この止血機構を調節しているのは、いったいどのようなものを解明するのがわたしの研究テーマでした。その解明には、やはり実験動物に助けをもらいました。実験としては、実験動物であるラットの臓器を灌流する方法を用いました。特に肝臓の灌流実験を多く行い、肝臓が止血の調節に果たす役割を考察しました。動物実験は長い時間を要しますが、途中で実験台を離れることは決してありませんので、その間ずっと実験動物と向かい合っています。実験動物と話は出来ませんが、実験動物はきっと何かを

わたしに伝えてくれているはずと実験中にいつも感じていました。その何かを拾い集めてデータにして文字化するのが実験者の使命だと思っています。実験の終わりには動物にネブタールという薬物を過量投与します。その時、いつも感じるがありました。先ほどまで生きていた実験動物の心臓が止まり、呼吸も無くなってしまう、実験動物はあたかもタンパク質の塊のようになってしまいます。そんな時、一緒に実験していた動物から何かがそっと抜けていった感じがしました。きっとそれが生命なんだろうと動物実験の終わりにいつも思いました。わたしも科学者の端くれですので、科学的根拠を以って起こった現象を説明しなくてはなりませんが、目の前で起こったことを明解には説明できません。実験動物はこの生きている仕組みとは何かをもっと勉強しなさいと教えてくれているのだと思いました。そして実験動物のお蔭でここまで生理学を続けてこられたのだと考えます。実験から得られた貴重なデータはすべて拾い集め、論文の形にして次に続く人のために残すようにします。論文では一緒に実験した研究者達を連名にして記録しますが、実験動物も共に実験した共同研究者であり、実は最も強い味方

であったと感謝しています。

(さかい じゅんいち スポーツ健康学部教授 2021.10.19)

恐れるな

ザノッティ・フランチェスカ・ワンダ

恐れるな、私があなたと共にいる。
たじろぐな、私があなたの神である。
私はあなたを奮い立たせ、助け
私の勝利の右手で支える。

(旧約聖書 イザヤ書 41章10節)

私は主、あなたの神。
あなたの右手を取って
「恐れるな、私があなたを助ける」と言う。
恐れるな、虫けらのようなヤコブ
イスラエルの人々よ。
私はあなたを助ける——主の仰せ。
あなたの贖い主はイスラエルの聖なる方。

(同 41章13～14節)

しかし、ヤコブよ、あなたを創造された方
イスラエルよ、あなたを形づくられた方
主は今こう言われる。
恐れるな。私があなたを贖った。
私はあなたの名を呼んだ。
あなたは私のもの。
あなたが水の中を渡るときも
私はあなたと共におり
川の中でも、川はあなたを押し流さない。
火の中を歩いても、あなたは焼かれず
炎もあなたに燃え移らない。

(同 43章 1 ～ 2 節)

あなたは私の目に貴く、重んじられる。
私はあなたを愛するゆえに
人をあなたの代わりに
諸国の民をあなたの命の代わりに与える。
恐れるな。私はあなたと共にいる。
私は東からあなたの子孫を連れて来させ
西からあなたを集める。

(同 43章 4 ～ 5 節)

皆さん、こんにちは。

今日皆さんに出会うことを楽しみにしていました。この機会を与えてくださった大学関係者の方々に感謝いたします。

はじめに自己紹介をさせていただきます。

私は、シスターフランチェスカと申します。37年前、宣教師としてイタリアから日本に参りました。それ以来若者の教育のために働いています。よろしく願いいたします。

今日皆さんと分かち合いたいことは、私に喜びと力を与えてくださった一つの神のみことばです。

先ほど読まれたイザヤ書（41章10・13～14、43章1～2・4～5）の中で何度も出てくる「恐れるな」「恐れることはない」「私はあなたとともにいる神」また、「恐れるな私はあなたを助ける」という言葉です。

一か月前、私は修道生活50周年を迎えました。シスターとして50年間神とともに歩きました。そしてこの長い人生の中でたくさん神のみことばは私の日常生活を照らしてくださいました。ところで数年前一つの発見をしました。聖書の中には、「恐れるな」という言葉は365回ほど使われているそうです。ちょうど一年

の日々と同じですね。何故でしょうか。

やはり人間はそれだけ恐れやすいものだからです。私たちは誰でも皆心の中に色々な心配、不安、恐れなどがあります。私も今皆さんの前で話すことに対して、少し不安を感じています。ですから神様は毎日一人ひとりにこの安心させるメッセージをくださるのです。

私はこのことを発見した時には、心の中に深い喜びを感じました。これほど神様は私を愛し大切に、私のことを心配してくださっているのだと感じたからです。その時から毎朝起きる時に神様が「恐れるな、私はあなたとともにいる」と私の耳元でささやいている気がします。ですから神様が私に準備された一日の中でどんな問題があっても、どんな心配があっても心の中に平和と安心、信頼の気持ち湧いてきます。もしかしたら、皆さんはこの話を聞くとちょっと疑うかもしれません。しかし、これは抽象的な話ではなく、作り話でもなく、私の体験から分かり感じたことです。神のみことばは生きている言葉ですから、人にいのちと力を与える言葉です。

実は5年前、私は病気になりました。癌と言われたとき、目の前が真っ暗になりました。暗いトンネルの中に入ったよ

うな感じがしました。しかし、最初の戸惑いの気持ちを乗り越えて、心の中にこの言葉が湧いてきました。「恐れることは無い。私はあなたとともにいる」と。そして、ある日、いろんな検査を受けるために愛知医科大学病院に行って待合室で座っていたとき、心の中に詩篇第23のことばが湧いてきました。「主はわれらの牧者、私は乏しいことがない。たとえ死の陰の谷を歩んでも、私はわざわざを恐れない。あなたが私とともにいてくださる」。その時、心の中は平和になりました。すべての心配、不安は消えてしまいました。逆にその病気は恵みであると悟りました。神様に、「いただきます」と言いました。この恵みのおかげで元気になって、今、皆さんの前で話すことができます。神に感謝します。

最後に皆さんに尋ねたいのですが「皆さんは幸せですか？」。私は、幸せです。皆さんは若いのですから、一人ひとり心の中に夢を抱えていることと思います。同様に、神様も一人ひとりのために夢を持っておられます。私が考えていること

は、自分の夢と神様の夢が一致すると私たちは本当に幸せになると思います。人生は、宝探しの様なものだと思います。だから、自分の使命を探してみてください。

私は皆さんの年齢の時にシスターになろうと決めました。それまでに悩みながら自分の使命はなんであるか、また神様は何を望んでいるのかということを考えて続けていました。その結果、20歳で修道院に入りました。自分の人生を振り返ってみると様々なことがありました。喜びも悲しみも苦労も沢山ありましたが、今私の心の中は感謝でいっぱいです。幸せです。神様がいつも共にいてくださったからです。

皆さんにはこれからいろいろなことが待ち受けていると思いますが、どうか、希望をもって前向きに進んでください。困ったときにはこの言葉を思い出してください。

「恐れることは無い。私はあなたとともにいる」

ご清聴ありがとうございました。

(ザノッティ・フランチェスカ・ワンダ 幼き聖マリア女子学園理事長 2021.10.29)

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」等のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからもPDFファイルでご覧いただけます。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(相木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？一問(はざま)から読む聖書—」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィツシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？一神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎——神に向き合った生涯」(小野 静雄)
- No.22. 「F.C.クラインと『敬神愛人』」(黒柳 志仁)
- No.23. 「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」
—内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ—(葛井 義憲)
- No.24. 「NHK連続テレビ小説『エール』とキリスト教」
キリスト教主義大学が大切にしたいこと—『敬神愛人』(西原 廉太)
- No.25. 「『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす」
(早瀬 和人)